

2011年  
10月31日  
月曜日

韓 燕麗 助教（映画史）

# 震災と映画

東日本大震災が発生した三日後の3月14日、松竹映画宣伝部より、中国映画『唐山大地震』——思い続けた32年』の公開を自主的に延期するという内容のお知らせが出された。以下はその知らせより抜粋したものである（傍点は筆者による）。

『唐山大地震』は1976年に実際に発生した震災によって引き裂かれた、ある家族の32年にわたる絆と心の復興を描いたドラマであり、地震災害や被災状況を娯楽目的に製作したパニック映画ではありません。しかし、映画の中で描かれる唐山大地震と四川大地震の地震を再現したシーンや被災者の救出シーンなど一部の描写がこの時節柄上映するには相応しくないと判断し、公開の延期を決定致しました。

上記の文章にあった「パニック映画」という映画ジャンルは、1970年代から定着しはじめた

ジャンル名で、英語圏ではDisaster Movieという。このジャンルは、予期せぬカタストロフィの襲来による都市文明の崩壊を主題としている一方、メロドラマとしての側面つまり善悪二元論がジャンルのもう一つ欠かせない要素である。また、ジャンルのお約束事として、映画の結末には常に問題の解決——危機的な状況から逃れて町が元に戻るという（パブリックな解決）と、登場人物が抱えていた個人的な悩みが解消されるという（プライベートな解決）の両方——が観客に提示される。その意味においては、典型的メロドラマの劇的構造を持つパニック映画は、そもそも単純に「災害や被災状況を娯楽目的に製作した」ものとは言えないのだろう。

さてネタバレに気を付けながら予告編を超えない程度で『唐山大地震』——思い続けた32年』の内容を紹介してみよう。死者20万人を超えた唐山大地震の救出現場で、息子と娘のどちらか一人しか救えない状況のなか、母親が断腸の思いで息子を選んだ。しかし廃墟の下で、母の選択つまり自分への死の判決を聞いてしまった娘が奇跡的にも生き延びた。彼女は家族の元に戻ることもなく、32年間、心に傷を負ったまま暮らしていた。四川大地震が発生した2008年、ともにボランティアとして被災地へ向かった姉弟が奇しくも再会し、32年間も断ち切っていた家族の絆は再び繋がったのである。この映画がパニック映画として特異なのは、一つの災害の中で問題の解決を提示せず、もう一つの災害の中で心の傷を癒した結末を提示したことである。映画の登場人物にとって、〈プライベートな解決〉つまり心の治癒には32年もの歳月を要した。一方、映画が描いた32年間は、中国にとつて、まさに文化大革命の災難から立ち直って復興を遂げる32年間だった。唐山大地震が起こった二か月後の1976年9月に毛沢東が死去、その一か月後に10年も続いた文化大革命によりやく終止符を

打った。この暴力的な大衆運動による犠牲者数は、数百万人から1000万人以上だとされ、文化大革命によって中国の経済発展は30年遅れたと言われる。疲弊した経済を立て直すために1978年に改革开放政策が提出され、国内体制の改革および対外開放政策が同時に推し進められはじめた。その後30年にわたる中国の驚異的な経済発展は周知の通りである。2008年に開催された北京オリンピックは世界にその経済発展の成果を誇示する舞台でもあった。

32年も経って中国人はようやく過去を振り返る余裕ができた。心の復興なしでは、パブリックな解決とプライベートな解決がともに提示されるこの映画は、作られることがなかったのだろう。東日本大震災を描く映画は、いつ世に出るのだろうか。その日が一日も早く到来することを祈るばかりである。